

ロシアにおける西欧化と近代化

—いわゆる「ロシア＝アジア説」をめぐる—

川 端 香男里

ロシアはアメリカとともにヨーロッパにとってのフロンティア＝辺境であり、ヨーロッパ文化とその担い手であるさまざまな民族の流入の上に築かれた。しかし歴史も新しく純粹に流入して来たヨーロッパ種の民族・文化の上に築かれたアメリカ文化にとって「西欧化」「近代化」という概念はそもそも意味をなさない。アメリカとは即西欧であり近代だったからである。

西欧からの「流れ者」の終点であり、その流れ者が国の命運を左右したという点においては、ロシアはアメリカときわめてよく似ている。成り立ちこそ違え多民族国家であるという点も同じである。しかしインド・ヨーロッパ語族とは言え、その東端のスラヴ語族の極東に位置し、アジア・東方と直接交わる位置にあったという点が異なる。西スラヴに属する国々が「ラテンの中世」に組みこまれて早くからヨーロッパに属していたのとは異なる状況にあった。東と西の両方にとっての辺境である国、それがロシアであった。

ロシアを建国したリュリック王朝以来、絶えざるヨーロッパ化の努力を読み重ねたにもかかわらずロシアは西欧から常にアジアの東洋的な国とみなされて来た。

ロシア・東洋説あるいはロシア・アジア説は、しかし、西欧にとって理解しがたい異質な要素を、西欧にとってより理解しがたい、アジアの中に投げこむだけのことであって、ロシアを説明するどころか謎をますます深めることになる。「ロシア人を一皮剥けばタタール人が出てくる」というヨーロッパ諸国に流布されている諺に見られるようにロシアに東方的・アジア的色彩を見出そうとする。ではタタールとは、アジアとは、という説明が次にくるわけではない。「中華思想」にとらわれた西欧にとっては、分かりにくいロシアをヨーロッパから除外することだけが関心事なのである。真にヨーロッパ的なものは何かと求めていながら、少しでも異質なものを排除していこうとする傾向はルイ十四世から始まって「文明批評家」ヒレア・ペロックやアンリ・マシスの場合のようなロマンス語世界一特にフランス中心のヨーロッパ像において頂点に達する。ヨーロッパはラインまでであってそこからはずでに東方が、アジアが始まり、ビレネーを越えればそこはもうヨーロッパではないということになる。しかしこれはらっきょうの皮むきの文化論と言ってよく、ちょうど三島由紀夫が純粹に日本的なものを求めていて、異質なものを次々と消去したあげく、天皇制だけを見出したのと似ていて、根源的なものを求めつつも、無意識なうちに自分の推論を一つの無意味でおかしな結論にまで導くことによって自らの説の破産を証明することになるのである。

ロシアという国がいわゆるヨーロッパの尺度ではかれない多くの要素をもっていることはこの国を訪れた人、この国の文化に接した人が誰でも感じることである。同じスラヴ人であるチェコの歴史家マサリックもその著『ロシア思想史』（原題「ロシアとヨーロッパ」）の緒言で、ロシアがどの国よりも彼をびっくりさせたと言っている（マサリックを驚かしたのは、ビザンチンのキリスト教的中世を保っている農民たちの古きロシアだった。マサリックをびっくりさせたのと同じ要素が実は西欧の人々にはオリエンタルな（東方的）色彩をもっているとみられたわけであり、また同じように西洋の西の辺境に位置するスペインも東方的であるとみなされてきた（エスパニョールといえばその言葉のひびき自体にオリエンタルなものが西欧語の文脈では予想される）。このような例は西欧人の感覚印象を比較的忠実に伝えていると言えよう。ロシアの広漠たる大地、

一面に広がる赤褐色の不毛のスペインの大地、キリストさえも赴こうとはしなかったと言い伝えのあるエボリ（『キリストはエボリにとどまりぬ』）以南のイタリアを眼の前にすれば、西欧人ならずとも誰でもここではもうヨーロッパは終わりなのだという感慨をもつのも無理からぬことかも知れない。問題はオリエントとか東方とかいう感覚的な表現をそのまま具体的なトルコ・タタールのアジアや、モンゴルのアジアないしはサラセン的アフリカと結合するところにある。

ロシアにギリシャ文明とキリスト教を伝えたビザンツ自体が地中海世界の東端にありアジアと交わる地点にあったのであるから、ビザンツ自体の東方性（つまりアジア性？）とその影響を受けたロシアの東方性は当然のことであり、そこにモンゴル・タタールによる支配が加わった……そもそもロシアの国土はシベリア、中央アジアを通じてアジア・モンスーン地帯に接しているのであるからピョートル大帝以後のヨーロッパ化を経た後もロシアがヨーロッパとアジアの中間的存在であることは明らかだ。ロシアはヨーロッパでもなくアジアでもなくユーラシアであり、ロシア帝国は神政的アジア帝国ないしは遊牧民の専制的帝国の後継者なのである云々……。

感覚的な風土印象や既成概念を寄せ集めてゆくと、こういう議論をどんどん発展させることもできるかも知れない。だがそこでちょっと待ってほしい。その議論の前提となっているいくつかの論拠に問題がないかどうかを確かめる必要がある。先にも触れたように東方・オリエントに位置しているからアジア的という議論がまず問題になるだろう。ビザンツ帝国の四分の三がアジアに属していたということから、ビザンツのアジア性を論ずる人はヨーロッパの文化的源泉であるギリシャ文化とキリスト教がヨーロッパの東南端、アジアに接するギリシャ諸島およびアジアの岸辺の諸都市で育ったことを思い起こす必要がある。そして他方においてギリシャ人にしても後のローマ人にしても、そして中世ヨーロッパ形成に寄与したゲルマン人たちも、いずれも北方からの移住者であったことをも考えるべきである。ところで世に「発生地主義」なるものがある。その出身地や民族の血によってすべてを決しようとする。その考え方によればたとえばハンガリーやフィンランドはフン系の出であるがゆえにアジアであると結論づけねばならず、彼らがヨーロッパにおいて伝統的に占めてきた位置を放棄しなければならないことになる。同じようにギリシャ文化は北方的とされ、キリスト教はアジア的とされねばならなくなるだろう。

十九世紀ロシアの思想界を二分した西欧派とスラヴ派はともにロシアの東方的後進性ないし特異性の最大原因をビザンチン文化の遺産においた。だがビザンツを東方的と見るのは西欧産の考え方に他ならないので、西欧派のみならず単なる国粋派とみなされがちなスラヴ派も西欧で生まれた観点でビザンツを見、ロシアについての判断を下していたと言って間違いのないのである。カトリック教会側のギリシャ正教に対する反発、ビザンツの政治体制の東方的な専制的性格に対する反感がビザンツを見る西欧側の眼を曇らせ、その結果ビザンチン文化はオリエントよりの形ではとらえられるようになっていたのである。ロシアの後進性という疑いのような事実を前にしたロシアの思想家が、ロシアの後進性をいかにももっともらしく説明してくれる西欧産の理論を安易にとりあげた理由はわからないでもない。しかし今日、ビザンチン文化の価値、歴史的意味が明らかにされるにともなってロシア人自身が前提としていた議論が西欧の排他的偏見に他ならないことがわかってきたのである。

西欧派は西欧文明の観点からピョートル大帝以前のロシアはまったくの白紙であると考え、ピョートル以降のロシアが西欧の文明に向かって開かれたヨーロッパ化の実験の場であると考えた。そして西欧人を驚かした「東洋的諸相」を自らの本質的属性とみなし、そのようなアジア的な状況から抜け出すことを緊急の課題と考えた。この点においてロシア知識人たちの意識は明治

の日本の「脱亜入欧」的意識と接近してくるわけであり、また視点の根本が西欧にあり、西欧の眼鏡で自国を見るという点においても共通点があると言えよう。西欧派はロシアをヨーロッパ化しヨーロッパの一員とすることを熱望した。しかし彼らが最後まで思っていたらなかったことは、日本の場合とちがってロシアがかつてビザンツとの深いつながりにおいてヨーロッパであったという事実である。近年、文化的統一体としてのヨーロッパはラテン的中世以降の概念であって、ギリシャ・ローマおよびその後継者たるビザンツはヨーロッパというよりも地中海世界というカテゴリーにはいるという考え方があり、またロシア建国の担い手であったノルマン＝ヴァイキング（ヴァリャーギ）も北方の蛮族であってヨーロッパ世界に入るのはかなりのちのことであって、ロシアがヨーロッパの一部であったということを証明することにはならないのではないか、という疑問もないわけではない。飯塚浩二の『ヨーロッパ・対・非ヨーロッパ』は大体このような考え方を紹介している。

文化的統一体としてのヨーロッパの定義を厳密化すること自体には大きな意味があり、スペイン、イギリスからポーランドにいたるラテン的中世のヨーロッパにおける意義は強調されなければならないが、それが一種のらっきょうか玉ねぎの皮むき文化論になり、西欧の自己中心的な文化的特権性の主張と重なる危険もないわけではない。ヘレニズムとキリスト教というヨーロッパの二大源泉を中世のほとんどの時代を通じて保持していたビザンチン世界をヨーロッパから切り離すという結論が出たその時から、そのようなヨーロッパ定義はあやしげなものとならざるを得まい。

ロシアの東洋性論議の次の根拠はアジア遊牧民との絶えざる角逐、またモンゴル・タタールによる支配という歴史的事実にある。異民族との絶えざる交渉が風俗的には多くの影響を与えるということはある得ても、まったくの異種文化・異種の宗教である場合にいつでも混合したシンクレティズムが生まれるとは限らない。宗教の例をとれば仏教やキリスト教が土着の宗教を吸収するという場合と異なり、ヨーロッパの辺境国における場合は、スペインの場合と同じようにロシアにおいてもきわめて戦闘的な正統主義という形をとることのほうが多いのである（ロシアが神聖同盟時代以来常にヨーロッパの警察官として行動し、今日も新たな辺境国たるソ連、アメリカが正統主義の旗印のもとに世界の警察官として常に活動していることがそれにつけても思い合わされるのである）。ロシアの歴史家もこの事実によくの注意を払い、ロシアの国土がアジアに対するヨーロッパの前衛であったことをもっぱら誇らしげに語ったのである。またモンゴル・タタール支配が完全に西とのつながりを絶ったという説は俗説であって（タタール支配は約200年しか続かず、サラセンのスペイン支配が700年におよんだことから見ればはるかに程度は軽いのである）、この時代にはまだかなり自由な交流があり、西との接触がより少なくなったのはビザンツ帝国の崩壊後のモスクワ公国の時代であって、その断絶の徹底性は、十六世紀から十七世紀のモスクワ大公国はヨーロッパのなかにあって唯一つルネッサンスと宗教改革を一つの時代として十全に経験しない国となったということにうかがえるのであった。

ロシアにルネッサンスを招来すべき条件がまったくなかったわけではない。中世文化の成熟の結果、近代への移行の一局面という意味でルネッサンスをとらえるとすれば、中世文化の成熟過程まではロシアは順調な道を歩んでいたものであり、「モンゴル・タタールのくびき」があったにせよ、アンドレイ・ルブリョーフに典型的に見られるような前ルネッサンス的現象がなかったわけではない。ルネッサンスの開花を阻害し、遅滞させた要因はモスクワ大公国の孤立化政策であり、このおしとどめられた「ルネッサンス」はその後ロシア文化史の上で執拗に開花の努力を

くり返すことになる。

成熟した中世文化は、それを否定する強力なルネッサンス・宗教改革を欠いているために色濃く十八世紀、十九世紀まで残存することとなった。

これは確かに後進性であり遅滞であると言い得るかも知れない。だがそれをそのままアジアないし東方と結びつけたところに「西欧派」の誤りがあったのである。これに反しスラヴ派はこの「後進性」の積極的な意義をとらえようとした。その後進性のおかげでロシアは、「墮落した」西欧が失ったキリスト教の純粋な信仰を保持し、ミール共同体のような、友愛と平等の精神にみちた社会体制をもっており、このような差異が西欧に対してロシアの権威を高めることになると考えた。第三のローマのメシアニズムをになうロシア民族のすぐれた特質が強調されることになったのである。スラヴ派はロシアのナロードの友愛の精神がツァーリの専制を支え、国家の統一をもたらしていると考え、そこにロシアの西欧との差異、つまりロシアの美点を見出した。そのためスラヴ派は誤って帝国の体制派と見なされがちであり、偏狭な国粋派と考えられることが多かったが、ロシア帝国の当局者は決してそうは考えず、彼らはしばしば西欧派と劣らぬほどの検閲を受けたのであった。

それはスラヴ主義が実はロシア産の考え方ではなくて西欧からの輸入品であったためでもある。明治以降の日本のナショナリズムが決して自生的なものではなく、ハイカラな舶来品という面ももっていたように、フランス革命とそれに続くナポレオン戦争によって政治的にめざめた東ヨーロッパ世界の知識人たちがドイツ・ロマン派から借用してきたのがスラヴ主義だったのである。政治的モデルとしてはドイツ語使用国民の統一を訴えたパンゲルマニズムがあり、言語的親近性から民族精神を導き出すロマン派的思考が、言語的類縁性からスラヴ世界の統一を訴えるパンスラヴィズムを生み出すことになったのである。国語、つまり口語を民族の唯一の基礎と考えるヘルダーはまた高度に発展したギリシャ・ローマ的文化はその発展のゆえにまさに自然から疎外され、デカダンスにおちいったと考え、その観点から後進的に見えるスラヴ民族こそ多くの美点を保持しヨーロッパの未来を担う民族だと主張したのであった。

パンスラヴィズム自体はスラヴ語という言語的親近性の上に構築されているにせよ、ロシアと他の諸国との歴史的事情の差異に影響されて、国によって異なった傾向をとり、ことにロシアにあっては国粋主義的傾向と帝国主義的な一種のスラヴ・インターナショナリズムとを兼ね合わせた複雑な形をとることになるが、その問題はひとまずおこう。この場合ロシアをヨーロッパから切り離しロシアの東方的性格を強調するかのように誤認されているスラヴ主義が、実はヨーロッパ産であり、またヨーロッパに対するロシアの使命を重視する思想であることが確かめられればそれでよいのである。

ロシア・アジア説の第三の根拠として、地理的にロシアがヨーロッパとアジアの間であるということがあげられている。これはきわめて錯綜した問題を提起することになり、論議の分かれるところで、にわかに結論の出ることでもないが、論点を整理していくことにしよう。

ノーヴゴロドとキエフを中心とする古い時代のロシアに関しては、ウラル以東のアジアの地域は未知の国であって、この当時のロシアの関心はすべて西に向いていた。ついでアジア遊牧民との戦い、ロシア帝国の版図拡大を通じて、この世界の六分の一を占める国土の上でアジアとヨーロッパとの交渉・争いの劇が演ぜられることになった。旧ロシア帝国にせよ、今日のソ連にせよ、多民族国家であって、そこにはヨーロッパ民族もアジア民族もあり、東洋もあり西洋もあるのであって、現実にはこの国家が欧亚両大陸に地理的にまたがっている以上、国家としてはヨーロッパ

でありアジアであるという当然過ぎる答えが返ってくるにすぎない。この多民族国家はイスラム教徒も仏教徒もあり、ウズベキスタンやトルキスタンのような中央アジアの国やグルジアやアルメニアのようなコーカサスの国をも包含している。だからソ連がアジア・アフリカ作家会議を主宰し、仏教徒会議に代表を送るということがあっても少しも奇異とするにはあたらないのである。地理的・民族的に「ソ連」はアジアの国でもあるというこの事実を人はしばしば忘れがちである。

ただロシアがヨーロッパかアジアかという設問を出す時には、このような旧ロシア帝国や今日のソ連全体の広がりや問題を問題にしているのではなく、いずれの時代にもロシア人（ウクライナ人、ベロロシア人および多くのヨーロッパからの帰化人を含む）という創造力豊かな民族がこの国の主導権をにぎり、この国の文化・経済・政治のあらゆる面を動かしているということを前提にしつつ、そのロシア的なものの本質を問うているのである。アジアに接しアジアをとりこんでいるという地理的環境や、アジア系民族を自国に包含しているといういわゆる「ユーラシヤ的性格」はこのロシアを決定する最終要因とはならなかった。

真に決定する力は、ウラジーミル・ヴェイドレーがそのロシア文化論で繰り返し力説しているように（『ロシア・その非在と現存』〔La Russie, absente et presente〕1949）、および『ロシアの課題』（ロシア語版、1956）歴史によって提起された問題を解決しようとする力なのであって、ノルマン人（ヴァリャーギ）の助力によって国家を形成し、ビザンチン文化を経由してギリシャ文明とキリスト教と接した時にロシアはそれを受け入れることも拒否することも自由な立場にあった。自由意志によってビザンチン文化を受容したこの間のいきさつはきわめて寓意的な形ではあるが、『原初年代記』に生き生きと描かれている。かくしてロシアはドイツやイギリスよりもはるか前にヨーロッパとなっていたのであり、有機的にヨーロッパの一部たらんと努力を重ねその後も非ヨーロッパ的な圧力に抗してその民族的な魂を守りとおしたことは歴史がよく示すとおりである。

ただここで問題になるのは、ピョートルの近代化である。このピョートルによる改革はヨーロッパへの窓を開くペテルブルグの建設によって象徴されるように、「ヨーロッパ化」として意識され、それと対比されてロシアにある古き要素がそのままアジア的（これは先にも述べたように古きヨーロッパに他ならないのだが）と考えられて、ピョートル以後の近代ロシアの努力はいわゆる日本でいう「脱亜入欧」と等しく見られるようになった。ロシア人自身が後進性を誤ってアジアと同一視したのであるから、このような考え方が生まれたのも無理からぬことではあったが、事実はおよそこれとは遠いところにある。

史上最初のテクノクラートというべきピョートルの改革はヨーロッパ史における最初の革命といてよく、フランス革命以前におけるもっとも急激なアンシャン・レジームの転覆であった。だからヨーロッパを単に輸入し導入するという文化移動というような生易しいものではなかったということを考えるべきである。このような断絶、カタストロフィックな発展はベルジャーエフが指摘しているとおりロシア史の特徴である。にもかかわらず、そのような史的発展の断絶がありながらタタール支配時代（1237～1480）、モスクワ公国時代（十七・八世紀）を除いて、ロシアは常にヨーロッパと緊密に有機的に結びつき、その歴史的断絶とつながるドラマチックな形でヨーロッパから借用し、またその借りを返すという形をとった。ピョートルのロシア（1682年以降）がそうでありソビエト時代がまたそうである。ピョートルの対スウェーデン戦争から、ナポレオン戦争にいたるまでロシアは常に勝者であって、そのためロシアの上層階級は自らをヨーロッパと対立させるよりは、ロシアをヨーロッパの指導的国家であると考えようになったの

も当然のことであった。ピョートルによって始められな急速な近代化は、十九世紀のロシア文学、世紀末から今世紀初頭にかけての学術・文化・芸術のルネッサンスによって実を結び、その富をふたたびヨーロッパに返したことになる。西欧の社会主義思想はロシアにおいて結実しそれがヨーロッパに激しい衝撃を与えたことになったのである。もちろんこのようなカストロフィックな歴史は一面ロシアの内包していた矛盾の現われであり、そのような弱点は今日のソ連においてもなお克服されていない。それは従来そのままアジア的性格と受けとられていたわけであるが、そのような既成観念は今まで述べたようにきわめて疑わしいものである。

玉座の革命家とも言われるピョートルは、独力で「ロシア的専制の暴力」を用いて近代化を強行したが、近代化・西欧化の路線はピョートルの父アレクセイ・ピョートルの異母姉で摂政だったソフィアにもある程度見られていたところで、いわばこの時代の大きな流れであったと言ってもよい。重視すべき点は、明治の日本と同じく先進諸国の軍事的圧力が存在し、それに対抗するために急速に力をつけなければならなかったという状況である。富国強兵、技術の導入という緊急の課題がこの国を近代化の方向に押しやったのである。

したがって18世紀の近代化の方向はきわめてプラグマティックな性格を帯びることとなった。芸術の中でもプラグマティックな性格の強いもの、建築・絵画・彫刻に力が注がれた。ピョートルは摂政ソフィアの治政下での不遇の時代に、民衆文化との深いつながりを持つことになるが、実力あるものを登用し、能力によって貴族に列する方策をとって人材を集めた。絵画、演劇などの世界では農奴層からも数多くのすぐれた人物が現われた。

(ピョートルと民衆文化とのつながりは、アンリ・トロワイヤの伝記にも詳細に描かれているが、なかでも中世的な愚者の祭りを復活させ、道化的な要素と権力とを混交させたピョートルの戦争ごっこ軍隊「少年兵連隊」は、ロシア語で言えば「滑稽な(ボチェーシヌイ)連隊」である。)

絵画・演劇・建築など、〈技術〉的性格の強いものはテクノクラート・ピョートルの強い意表にもかかわらず貴族たちの蔑視の対象であった。カンテミールの『諷刺詩』からもうかがえるように、知識・学問の軽視の風潮は仲々改たまらなかった。西欧的な意味での文学もきわめて少数の限られた人々のためのものでしかなかった。中世における文学の存在様態一口誦文学と聖職者による記述文学—の上に、西欧的文学が、いわばホットケーキの上の蜜のように塗り重ねられたと言えようか。

文化・芸術的には17世紀以来、きわめてバロック的な要素が浸透していたが、文学においても例外ではなく、カンテミールにしてもロモノソフにしてもバロック的要素を色濃く残している。しかし、文学において西欧に追いつき追いこすという姿勢ときわめてよく適合したのは「古典主義」である。西欧化、西欧から学ぶという「模倣」のイデオロギーこそ古典主義なのであった。

18世紀古典主義は文学史的に見ればもちろん、スマローコフに始まり、ロシア・センチメンタリズムをもって終幕となるわけで、1750年からの約30年間を指すわけであるが、先ほど述べたような意味で18世紀全体の文学の指向を古典主義的と定義してもいいかと思う。ロモノソフがポーランド・ウクライナ系の文学のラテン的中世的要素を批判して、古典的なラテン語、ギリシア語の世界にもどることを主張した時、古典主義は西欧で言う「ルネッサンス」の色彩を帯びることとなる。ジュコフスキ、プーシキンなど、ロシア・ロマン主義を切り開いた人々の中に色濃く残っているのはまさにこのような意味での「古典主義」に他ならない。

そしてロマン主義が、国民性・民族性(ナロードノスチ)の要求というイデオロギーを基盤にもち、18世紀という急激な近代化の中で見失われた民衆文化へと向って行った時、初めて真の意

味での国民文学、近代文学の開花ということが招来されることになる。政治的・歴史的には1812年のナポレオン戦争と合致することになるのである。（コージノフがロシア近代文学の成立をこの時点に求めようとしたのも、その意味では理解できる。）